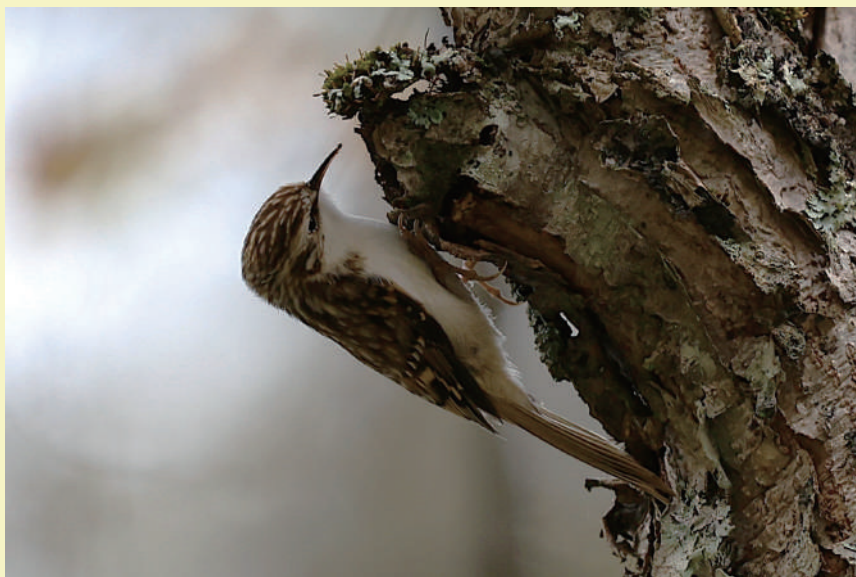


教文通信写真館

キバシリ（木走） 2024/10/20
長野市 戸隠

写真とエッセイ：伊藤広昭さん（生物教育研究会 松本県ヶ丘高校）

キバシリの和名はその行動に由来していますが、野鳥の和名の由来は何でしょうか。カッコウの仲間は皆その鳴き声から由来しています。カッコウは世界どこでも「かっこう」と聞こえるらしく、英名は Cuckoo、独名は Kuckuck、仏名は Coucou、学名の属名まで Cucuius です。

続きは 7P

教文通信

発行所
長野県教育文化会議
発行人
寺尾 真純

今号の記事

01-03
上伊那支部ミニ教研報告
03-05
開かれた学校づくり全国交流集会
06-07
教育のつどいレポート紹介
「変わるかな・・・戸隠分校特別支援」
08
第5回総合研究会案内
「授業づくりを考える総合研究会」

上伊那支部ミニ教研

飯田市平和祈念館・満蒙開拓平和記念館
過去を学び 平和を考える



コロナ禍を経て、六年ぶりに上伊那地区のミニ教研が開催されました。本部の下岡さんにマイクロバスを運転していただき、上伊那から飯田へと「地元の戦争を知ろう」ということで11名の参加がありました。

(1) 飯田市平和祈念館

歴教協会員で、元教師の原英明さんと吉澤章さんに講話していただきながら、飯田市平和祈念館ができた経緯や下伊那での戦争の傷跡、731部隊についての展示を周りました。731部隊のことを知っている人がどれだけのいるのだろうか。私自身、ここに来て学ぶまで恥ずかしながら知識を持ち合わせていませんでした。実際に身に着けていたものや使用していたものが展示されており、生々しい現実を目の当たりにしました。設立の経緯の中で、「被害と加害の両面から」という文言は消されてしまったということでしたが、被害者の側面だ

展示されなかった731「幻のパネル」を見ながら講義を受ける



れました。私たちは実際に体験してはいませんが、起きたことを知り、想像して、今の世の中がどうなっていくのか注視し、おかしいことには声をあげて団結していくことも必要なことです。原さんや吉澤さんをはじめ、たくさんの方の情熱と地道な活動でここまでの施設を作り上げてくださったことにパワーをもらいました。

(2) 満蒙開拓記念館

昼食後は、満蒙開拓記念館へ行きました。独立法人となり、毎年二万人の方にご来館いただいているとのことでした。まずは、職員の三沢亜紀さんの話を聞き、その後、元松川高校教諭でボランティアの菅沼節子さんにお話を聞きながら展示を周り

ました。満州国の成り立ちから、歴史的なお話を聞き、満蒙開拓団のお話をされました。長野県に住んでいながら、なかなか周知されていない事実も多く、ぜひ生徒にも知ってもらいたい、実際に満蒙開拓記念館に足を運び、お話を聞いてもらいたいです。

三沢さんは、小中学生の平和学習で訪れてもらうことも多く、この満蒙開拓の話をした後、小学生からの質問で「中国の人はまだ日本のことを怒っていますか？」と聞かれたと言います。小学生であれ思うことがあるので、年齢は関係なく心に刻まれることがあるのだと思います。

私自身も実際に足を踏み入れてみて、知らなかった事実と出会い、また遺品や証言、実際の手紙を見たことによって、「戦争」は遠い過去の、ありえない日常ではないのだと感じました。日常の隣にあるものとして学び、自分自身への戒めにもなりました。その時代と同じような世の中にならないように、「戦争はダメ、平和がいい」だけの漠

然とした思いだけではなく、世の中のことに関心を向け、戦争の歴史を学び、大切な人を守る盾として学び伝えていきたいです。

(3) まとめ

実際に自分の足を使い、目で見て、手で触れることでしか、学べないことがありました。平和学習を高校生にどう教えていくか、考えながら学びました。ですが、高校生に伝えることよりも何よりも自分自身の「長野県での戦争」を知らないことが多く、非常に学びの多い有意義な時間となりました。

(4) 参加者の感想より

・過去を振り返り、記録することは、日本人310万の6倍以上が亡くなったアジア太平洋戦争を後生に伝えるために必要ですね。飯田・阿智の皆さん、すごい!!

・飯田市平和記念館では、当時の資料を見ながら戦時下の悲惨で過酷な状況を学びました。世の中に出回らない、戦争が多くあり、多くの人が苦しんだ過去に少しですがふれることができました。

満蒙開拓記念館では、本校では毎年館長さんをお招きして講演会がありました。記念館に行ってみると、今までのイメージがかわりました。全国一の開拓民を送り出した長野県。加害と被害の両面を考えられました。広島・長崎の戦争の話は、多くの方が知っていますが、長野県に居ながら満蒙開拓の話をよく知らなかったことが本当に恥ずかしいです。実際に見学したことで、多く



のことを学ぶことができました。ありがとうございました。(ペンネーム…ゆーさん)

・どちらの資料館でも、講話・解説をして下さった先生方の「戦争の真実を学び伝えて、平和について考えていかなければいけない」という熱意をひしひしと感じました。どこへ行くにもマイクロバス横づけで至れり尽くせり、学びはもちろん美味しいランチも和菓子店での買い物も充実、楽しい秋の一日でした！ 教文や組合の活動は、かつての同僚の懐かしい方に会えたり上伊那の他校の先生方と話ができたというのが何より宝物だと改めて感じました。

・飯田市平和祈念館で、案内して下さった方が「加害と被害の両面から戦争の残酷さ・悲惨さを学ぶことの大切さ」をお話してくださいました。それに相反する勢力もいる中で、長きにわたって訴え続け、活動されていくその姿勢に感銘を受けました。その中で、旧満州731部隊に所属していた方たちの証言についてのお話もありました。証言者の方たちの自責の念や心の傷を抱えながら生きてこられたことや、80歳を越える年齢になって



これを後世に伝えなければと考え、やっとお話しすることができた、というその思いが想起される内容でした。また、満蒙開拓記念館もそうなのですが、負の遺産も含めて、その実態を知ることが大切です。戦争体験者が少なくなっていく中で、その悲惨さを後世に伝え、語り続けていくことの意味を痛感しました。ずいぶんお会いできなかった方も参加され、旧交を温めることもでき、またおいしい飯田の和菓子も購入出来て、大変充実した一日となりました。

(5) おまけ

飯田市といえば、すてきな和菓子屋さんが多いことでも有名です。いとうや、船橋屋でちゃっかり買い込み、お腹にも嬉しいミニ教研となりました。ぜひ来年度も実りある自主研修をしていきましょう。

日時…2024年11月16日(土)

行程…マイクロバス伊那市役所集合8時15分／坐光寺インター／いとうや(和菓子屋さん)／10時／11時30分 飯田市平和祈念館／昼食・ごか食堂／13時／15時20分 満蒙開拓記念館／船橋屋(和菓子屋さん)／帰路

(平松未来 箕輪進修高校)

《教文事務局より》

支部活動費として、支部ミニ教研に対して補助をしています。

詳細は、県事務局までお問い合わせください。

開かれた学校づくり

全国交流集会 (11/23・24 川崎市)

「開かれた学校づくり」全国交流集会が11月23日に川崎市で開催されました。24日に大東学園高等学校で第20回公開研究会・三者協議会が開催されました。

◆開かれた学校づくり全国交流集会

全国交流集会は、「学校や地域において子ども意見表明の機会をどのように保障していくか」ことも基本法・こども大綱を活かした学校づくり」をテーマに官民の教育関係者により報告と協議が行われました。4本のレポート、シンポジウム、指定討論が行われました。レポート①開催地の川崎市教育委員会からは「子どもの意見を取り入れた学校づくり」の実践で学校運営協議会の取り組みが報告されました。川崎市は全国初の子どもの権利に関する総合条例を制定しました。②地域にある「子ども・保護者の居場所」との出会い／「てとと」の活動について神奈川県の小学校とルポライター・杉山春さんから報告がありました。相模原市でも課題が多い地域で、居場所づくりをし、利用する子どもは不登校や約6割が外国につながります。③旭丘高校生徒会から「みんなで考え討議しより良い学校をつくる」、全学協議会の実践報告がありました。協議会は生徒会・PTA・父母懇談会旭丘支部・教職員・同窓会代表・

事務局の六者懇談会により構成され、「私たちの学校づくり宣言」(2004)を出しています。

④川崎市こども未来局青少年支援室から「川崎市子どもの権利条例に基づく子どもの参加と意見表明を保証する取組」が報告されました。川崎市は条例で「子ども会議」や「川崎市人権オンブズパーソン」を設置し子どもの相談や救済をしています。

「開かれた学校づくり」全国交流集会は2000年に第1回が高知市で開催され23年目を迎えました。全国連絡共同代表は、宮下与兵衛さん(東京都立大学・元長野県高校教員)です。2025年度に第24回全国交流集会を長野県で開催する予定です。

◆大東学園高校三者協議会

大東学園高校(東京都)において11月24日に、教職員、生徒、保護者、同窓会による「第40回三者協議会」が開催されました。県内外からも参観者が詰めかけ、体育館は熱気に包まれました。

副校長は基調提案で「三者協議会は学校づくりへの参加・要求実現に主眼を置いている」と説明し、「三者協議会の仕組みを通じて、ルールにコントロールされる生徒ではなく、自分



も他者も大切にする方法を考え、主体的に行動する主権者に成長してもらいたいと願っている」と参加者に訴えました。

続いて「始めの会」で、①体育館の冷暖房に関して、②昼食プロジェクトの報告が生徒会執行部からありました。2023年度に体育館の活動中に体調を崩す生徒がいたこと、熱中症の危険が増すので、冷暖房機の設置を要望した経緯説明がありました。2台が追加設置され、それに関する生徒の感想や状況を報告しました。昼食プロジェクトでは生徒会が昼食販売について生徒の要望を調査し、業者選定や喫食に係るルール作りをした報告をしました。

2024年度、「三者協議会要求書」では「教員の許可がなくても授業中の水分補給を可能にしてほしい」が項目とされ、生徒アンケート、試行実施結果などデータに基づく要求が学校に対してなされ、協議の後、学校からの回答を三者で確認し実施するとなりました。

その後、三者による懇談が行われました。テーマは「三者の視点から、共通体験(体育祭・文化祭・身だしなみ week)を経験してどうでしたか?」でした。生徒からの率直な発言と、対等に回答をする教職員と保護者の姿勢に、民主的な学校運営が三者の協議によって具現化していることを実感しました。同時に生徒が三者協議会により学校運営へ関与することを通して成長していることを感じました。

(内堀守 教文事務局長)

参加者からの報告

◆川崎市の自治体主導の「子ども会議」の取り組みは、教育委員会所管となると、果たして本当の自由な意見表明の機会となるか疑問に感じました。市長との懇談会も開催されたようですが、参加児童・生徒に事前の指導が入り、発言がコントロールされるのではないかと思ってしまうしました。旭丘高校の全学協議会の取り組みの報告では、高校生3人の堂々とした発表が聞けて頼もしく思いました。自分の意見を言える機会を持ち、人前で意見を言えるようになり、活動を通して成長をしたことが伝わってきました。

大東学園高校の三者協議会では、協議、懇談の場で生徒が自由に発言している姿が印象的でした。要求をする生徒側が事前の準備も重ねてきている様子もうかがえました。社会も変われば、学校も変わっていくものです。変えていくことにはエネルギーがいりますが、安易に手に入れたもの、安易に変わったものには価値がないと思います。来年は身だしなみ規定の協議になりそうですが、どう展開していくかが興味深いです。

(牧内淳一 長野東高校)

◆今回はテーマとして『学校や地域において子ども意見表明の機会をどのように保障していくかー子ども基本法・こども大綱を活かした学校づくり』、川崎はじめ神奈川県下の実践報告を中心に交流し、3つの視点(①学校は「意見表明の機会の確保・子どもの意見の尊重」にどう取り組んでいるのか。②学校、地域は声を上げにくい子ども

の意見を、どう聴き、応答、支援しているか。③自治体は、子ども施策に、子どもと保護者の意見を反映させるためにどうしているか)から子どもが意見表明しやすい学校づくりと地域づくりについて学び合うことがあげられています。

「川崎市子どもの権利に関する条例」は2001年4月に施行されています。午前の部では、川崎含め神奈川県下でこれまでの様々な取組(行政関係者、居場所運営ルポライター、学校教職員、私学高校生ら)が報告されました。高校生との質疑もありました。午後は指定討論、on-line含め参加者との質疑討論、最後は会の共同代表、宮下与兵衛さんからまとめの挨拶で終了しました。子どもの権利条約批准から30年、現在の到達点と課題の確認とも言えそうです(こども家庭庁発足、こども基本法、こども大綱、生徒指導提をめぐって今後の課題もあります)。今回も中身の濃い催しとなりました。(寺尾真純 岩村田高校)

◆今回、以前からぜひ、見てみたいと思っていた東京の大東学園高校の三者協議会を参観する機会をいただいた。期待にたがわず、大変エキサイティングで刺激的なドラマに遭遇できた思いがしている。

その日は、まず「授業中に水分をとらせて欲しい」という生徒側からの要求に対して討議していた。生徒会では全校生徒にアンケートを実施し、授業の妨げにならない形での要求の実現をはかるよう、何ヶ月も掛けてクラス討議や執行部での話し合いを重ね、綿密に資料を用意したものを示す。

いきなり議決ではなく、それぞれの立場から、なぜ、その校則が今まで必要だったかを含めて三者が意見を出し合う。そんな手順を踏んで協議した結果、生徒側からの提案は承認された。

職員会議で決めればすぐに決まることをまさに、大変な手間と労力をかけて、教育的意義を感じて20年も続けている、教職員のその情熱に感銘を受けた。そして大きな成長を上げている生徒達、そして保護者も学校づくりの一員として発言している。

最後に副校長さんの挨拶文の次のような一節を紹介したい。「一見アナログなこの取り組みですが、AIやICTが高度に発達したこの時代に、対面して、ことばによる意思疎通で、『折り合い』をつけることは人間同士にしかできない、むしろ価値あること」「教育が『決まった所作を繰り返し、表面をきれいに整えること』に終始し、数値化とカテゴライズによる評価軸ばかりに偏ると、『学校(人間)が学校(人間)じゃなくなる』と捉え、今一度、学校を『何かを与えられる場所』ではなく、『自分からつくりに行く場所』としての潮流に押し上げていく必要を感じています」

◆大東学園高校の三者協議会(以下…協議会とする)を見学させて頂いた。当日の午前中は、昨年協議会で決まった体育館の冷暖房の設置について、また、コロナの影響で中止になっていた昼食事業の復活について生徒会から詳しい説明があった。その後、これまでの学園の協議会についての経緯を含めた学校の状況の説明が教職員からあつ

た。大東学園では、2003年より協議会が始まり今年で22年になるという長年に渡り継続している。これについては、生徒の発表ぶりからも生徒達が協議会を通して主体的に学校運営に関与している状況を垣間見ることが出来たような気がした。協議会は、午後から始まった。今回の協議会の主な協議事項は、教員に許可を取らなくても水分補給を可能にしてほしいというものであった。10月に全校で試験的に一定のルールを決め授業中に水分補給を行ったという経緯があり特に大きな問題がなかったように比較的スムーズにこの生徒からの要求は、承認されることとなった。これまでのところでは、ある意味で形式的に進められた感じがあつたが、注目すべきところは協議会の後半の部分で「身だしなみ」についての討議の時間であつた。学園では、非常に細か校則が定められており、その校則を変えて欲しいという生徒の意見に対して学校全体の事を考える慎重な意見をする教職員の意見、また、さまざまな角度から出された保護者の意見など活発に議論が繰り広げられた。生徒・教職員・保護者が、対等の立場で意見が交わされていた。協議会では、生徒たちにとって学校運営について自分たちの意見を表明できる場でありそして学校を変えていく場である。このことは、生徒たちにとって主権者を育てる学びの場であると感ぜられた。

(石川伸次 松本筑摩高校)

※紙幅の都合で、参加者の報告は一部を掲載。全文はデジタル版37号で紹介しています。

2024教育のつどいレポート紹介

変わるかな・・・戸隠分校特別支援

長野吉田高校戸隠分校 高橋加代子

1 はじめに

戸隠分校に転勤して2年め。昨年1年間、養護教諭として、分校の特別支援やコーディネーターの仕事を見ていました。コーディネーターの主な仕事はSCや外部との日程調整で、依頼があれば支援会議を開くといった状況でした。年度途中から、特別支援って、もつと他にやることあるんじゃない？と思うようになり、2年目の今年、特別支援コーディネーターに立候補しました。

感染症対策も緩和され、外部との連携がとれるようになった今年、まだ年度途中なので継続しているものもありますが、私なりの特Coとしての活動をまとめてみました。

2 本校の紹介

戸隠分校は昼間定時制で、全日制と同じく朝から授業があります。生徒の在籍数は27名で、朝7時長野駅発のバスで登校してきます。更埴や小布施から通う生徒もいるので、朝暗いうちに家を出る生徒もいます。

中学では不登校や午後から登校だった生徒達もいますが、遅刻せず登校してきます。

3 SCの利用状況

昨年までは、1年生を中心に、11月以降はほぼ同じ生徒を継続的に面談していました。今年の状況は、毎月、午前3時間の月2回で、できるだけ曜日を固定しないようお願いしています。4月、各学年の担任がCSと面談し、情報交換をしながら気になる生徒を話題にしています。5月～6月は1年生全員の面談を実施し、継続を希望する生徒、SCが気になる生徒など情報交換をしています。7月からは学年を限定せず、復学した生徒や精神的に不安定な生徒達の面談を実施し、8月は夏休み明けで、なんとなく学校に足が向かない生徒の面談。9月は3年生で進路に悩んでいる生徒や担任と面談を行い、10月は、継続希望者と欠席数が増えている生徒の面談をお願いしました。11月以降も、多方面から生徒にアプローチする方法を教えていただけるSCと面談を重ねながら、問題を抱えている生徒への支援を続けていきたいと思っています。

4 支援会議

昨年、特別配慮を求める場面緘黙のMさんの支援会議を校内で定期的に開きましたが、サポート教室の担当者と特Coの考え方に相違があり、うまくいきませんでした。

今年はテーマを1本にしぼり、事前に担任から親とサポート教室に連絡を入れて支援会議を開くようにしました。特に、本校生徒に課せられている校内「生活体験発表」はプレッシャーで、ずい

ぶん前から担任やサポート教室に不安を訴えていたので、発表方法の検討を重ね、当日は原稿を配布して参加者が黙読する形で発表に変えました。会場でのMさんは、席に着いてから表彰が終わるまで同じ姿勢で緊張感が漂っていましたが、発表会終了後席を立つてゆっくり教室に向かう姿をみてホッとしました。

外部機関での支援会議

外部機関での支援会議は、生徒側で予約してくれるので、担任と出かけていきます。T病院の作業療法士が、分校の他の生徒も担当していることがわかり、別の担任との情報交換につながったり、幼児期から見ているので成長発達に応じた指導の話を聞くことができたりと、貴重な情報収集や見立ての機会になります。

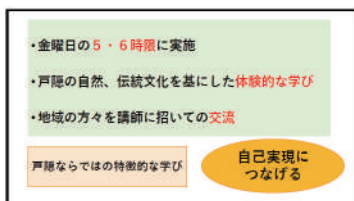
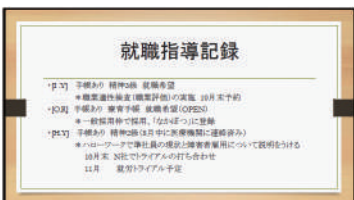
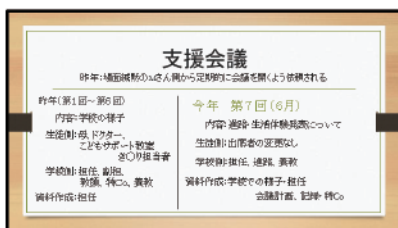
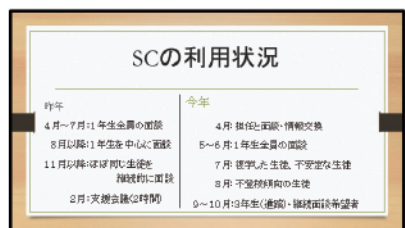
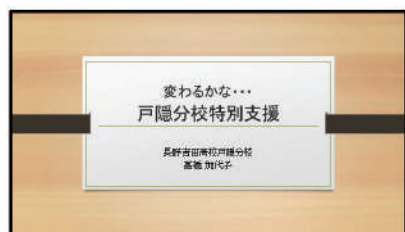
3年生の進路に関する支援

昨年までは担任が生徒と相談して進路を決めていましたが、今年は未経験者が担任でも困らないように、「見える化する」取り組みをしています。

手帳を持っている生徒の就職指導記録

IY君は、鉄道少年団に入っているおたくです。第一希望のJR東を受けて不採用、その後自衛隊、介護と色々変わるので、一度職業適性検査を受けることを勧められ、親と障害者職業センターに行き、この結果を見ながら就職の方向性を決めていきます。

OR君は内定後、どの仕事が入っているか適性を



見ながらの就職になります。
HY君は、在学中に会社のトライアルを受けながら、自分に合う仕事を探していきます。

巡回相談支援
今年から始まった事業で、長野養護学校の戸谷先生に來校していただき、生徒の理解や相談に対応していただいています。高校は支援級もなければ、支援方法を学んだ教員もいないので、非常に助かっています。

5 課題

高校での特別支援は、在学中及び卒業後の就職や進学先との連携が必要になります。

手帳を持つ生徒達の就職は就労支援等で社会が支えてくれますが、発達障害を持つ生徒の進学は移行支援につながらないまま卒業することが多く進学先で苦労するケースが増えています。コーディネーターの役割は「つなぐ」こと、生徒のよき理解者として在学中からその先の適切な進路選択ができるよう支援の輪を広げる努力をしなければと思います。

教文通信写真館 エッセイ（つづき）

コマドリも鳴き声が馬のいななきに似ていることに由来した和名です。見た目から和名が付いているものも多く、ハクチョウ、メジロ、オオルリなど枚挙に暇がありません。そして行動から和名が付いている例もたくさんあります。カヤグりは草むらに潜んで生活しているから、モズは百舌鳥でいろいろな鳥の鳴き真似をするからです。

さて、キバシリは「木走」で、森の樹木の側面に鋭い脚爪で垂直に留まり、かつ、じっとしていることはまずありません。樹木の幹を下のほうから上に向かってらせんを描くように駆け上っていきます。その間、下に湾曲した細い嘴を樹皮のすき間に差し込んで起用に小動物を器用に捕らえて採餌します。

今回掲載の写真は2024年10月長野市戸隠森林植物園で撮影したものです。当日も、樹木の幹に留まっているのを見つけたのですが、直ぐに裏側に回ってしまいました。でもし暫くすると先ほどより上部の表側に現れ、何回かこれを繰り返すと別の幹の下部に飛び移り、先ほどと同じことを繰り返していました。英名はTreecreeper。creepは、はっていくとか、こそこそ歩くといった意味だそうですから、まさにキバシリの行動を写した英名といえましょう。日本鳥類目録第8版では、キバシリ科キバシリ属キバシリに分類され、わが国には北海道に分布するキタキバシリと本州以南に生息するキバシリの二亜種が生息しています。先日は姫路から探鳥に戸隠にいられた方とともに観察したのですが、キタキバシリを見たことがあるが、キバシリは初めて観察できたと興奮されていました。戸隠では普通種ですが、私にとっても希少種です。

キバシリ 2024/10/20 長野市戸隠

お詫びと訂正 教文通信 283号で、伊藤広明さんの漢字表記を誤って掲載してしまいました。申し訳ありませんでした。訂正をお願いします。

授業づくり
を考える総合研究会

長野県教育文化会議
第5回総合研究会
on-line併用
ハイブリッド開催

非専門職から専門職分野まで浸透する労働作業の「マニュアル化」は教育の世界にまで広がっています。教科書教材の定型化が進むなかでどんな授業を考えたいのでしょうか。「教科書で教える」のか「教科書を教える」のか。そこには大きな違いがあります。授業や教育の「スタンダード化」や「画一化」が指摘される現状をどう考えればいいのでしょうか。ICT利用、授業支援アプリの影響をどう「探求活動」をどのように展開していますか。自律的に教育活動を進めるために何が大切なのか。講演と授業実践から探ります

講演・実践報告
& 討論

講師 子安 潤 さん
愛知教育大学 名誉教授
現在、日本教育方法学会理事、日本カリキュラム学会理事、日本教師教育学会理事・編集委員

20世紀と21世紀の
授業の画一化
貧困化を反転する

開催日：2025年1月11日（土）10:30～15:30
会場：松本市勤労者福祉センター 2-5教室（オンライン併用）

実践レポート

報告（1）
「文学国語の授業から
定番教材「こころ」の授業」
牧内淳一さん
（長野東高校）

報告（2）
「探求と図書館教育」
竹腰史佳さん
（南安農農業高校）

報告（3）
「県立歴史館でできる探究的学び」
鈴木 実さん
（県立歴史館）

どなたでも
会場でも
on-lineでも
参加できます

講師最新刊（11/10）
貧困化する
授業からの反転
注：画一化する授業からの自律・授業づくりで変える高校の教室（社会）・教科と総合の教育方法・技術

デジタル化と「子ども主体」の
偽装を真正の教育へ

貧困化する
授業からの反転

子安 潤
RYUN YASAI

デジタル化の落とし穴、ログ収集の危険を検討
個別最適な学びと資質能力論の幻想性を問う

教師の教育活動から思考が奪われ、
より一層の画一化が図られる世界に警鐘を鳴らす！

学文社

長野県教育文化会議
第5回総合研究会
授業づくり考える総合研究会

1月11日 10時30分～15時30分
オンライン併用 ハイブリッド開催主
会場：松本市勤労者福祉センター 2-5
詳細はチラシあるいは教文HPにて

「研修履歴記録システム」で
「任意」の研修として記録可！
どなたでも 会場でも
オンラインでも参加可能です。

参加申込は
こちらから



表の声と出来上がる実態がかけ離れていることがある。教育の世界にもしばしば発生している。真実味のない声、偽装したとしか思えない事態がある。そんなとき、実態からこぼれ落ちる小さい声、隠されてしまうもう一つの声を探す。その声の中に可能性が見える気がすることもある。個々の教師は、画一化を最初から心底願っている人は少ない。にもかかわらず、構造の中で画一化してしまっている。そうだとすれば、子どもに良い教育を保障するという憲法的な観点と教育の条理から現行のシステムを捉え直していく必要がある。まず第一に、教材選択権を保障する必要がある。第二は、子どもの分り方や思いもしくはリアルな声に注目することである。数量や記号に変換されたデータではなくて、生の声と姿に注目することである。教師の専門職性と子どもの分り方への注目を通じて、子どもに応答する創造的な教育を始めることができる。人間教師と子どもの即興的性格の呼応する活動にしていることが期待される。現在問われているのは、デジタル化されたシステムに乗った教育活動をそつなくこなす定型的教師像を目指すのか、それとも教育の画一化と学びの貧困化に専門性をかけてタクトを振る教師と教育活動を目指すのかなのである。

講師最新刊（11/10）「貧困化する授業からの反転」「おわりに」からの一部抜粋